◎沖縄タイムス　2016年05月05日　朝刊28面　記事数：1/1　<1/1枚>
ここにいるよ　沖縄子どもの貧困（３７）＝第３部　学習支援（１０）　苦手克服授業が鍵に（第３部おわり）

苦手克服 授業が鍵に

第３部 学習支援〈10〉

ここにいるよ
沖縄 子どもの貧困

友達同士学び合う関係重要

「勉強は小学校で諦めた」「授業中はひたすら寝てる」「先生からは無視されてる」。本島南部で子どもの居場所になっている施設に集まる中学生たちは口々に言う。「勉強は苦手」というタイプが多く、家庭環境に問題を抱えている子もいる。

「授業は先生が一方的にしゃべってるだけ」「意味分からん」「1校時から6校時まで、ずっと机に突っ伏してる」。子どもらは居場所での学習支援で勉強に取り組もうとしているが、数学などは中学校の学習内容の前に、小学校の算数まで何年もさかのぼる必要がある。支援する講師は「学力保障は本来、学校が責任を持つべきだ」と語気を強める。

講師は「そんなの分かってると言いながら、実際は分かっていない箇所が多い。だが本人のプライドもあり、小3あたりの勉強から始めようとは言いにくい」と難しさを語る。「内容はさっぱり分からないのに、長時間黙って座っているのは苦痛だと思う。どんな子でも参加できて意欲的になれる授業だといいのだが…」とため息をつく。

■　■

「学校ができる子どもの貧困対策で最も重要なのは、日ごろの授業ではないか」。全国の小中学校の校内研修や授業研究でアドバイザーを務め、海外事情にも詳しい村瀬公胤・麻布教育研究所長は問い掛ける。

子どもたちの学び合いや対話を軸にする「学びの共同体」の学校づくりを支援し、県内の学校でも教師たちへの指導、助言に関わる。「貧困かどうか、にかかわらず、全員が主体的に学びに参加できる授業が必要。どんな子も排除せず、ここにいていいんだと思える学校が求められている」と話す。

荒れている子どもたちの「どうせ、俺なんか…」「やっぱダメだよ」などの言葉が気になるという。「困っているのに『助けて』と言えない子が多い。生きていく上でサポートの受け方を学ぶのも大事。日常の授業で友達同士が支え合う関係をつくっていく必要がある。困っているとき『助けて』と言える力を育てられるのが学校の授業だ。その事実を数多く見てきた」と強調する。

■　■

「学びの共同体」の学校づくりに取り組む全国の多くの小中学校で、問題行動や不登校が減り、学力が上がるなどの効果が出ている。県内の小中学校でも徐々に実践校が増え始めた。

村瀬さんは「子どもたちが、学びの主人公は自分だと思うことが大事。やらされる『お勉強』をどれだけやっても自分のものにはならない。人とそでなく、自分ごとの学び にすることが重要だ」と持論を語る。

「学び方が分からないという子が一人で学習するのは大変だが、みんなで協力して考え、追求していく授業なら、そこを乗り越えられる」

学習支援の有効性については「子どもが手を伸ばす前に与えるのでなく、伸びようとする手を支えてあげるのが支援者の役割。子どもたちの自己肯定感を育て、自分の将来をつくるのは自分なんだという意識を持てるような支え方が必要だ」と指摘する。（「子どもの貧困」取材班・田崎正雄）

＝第3部おわり

（第4部は中旬から掲載します）

教室で授業を受ける中学生＝本島南部

記事に関するご意見、情報をお寄せください。
ファクス：098(860)3483　メール：kodomo-hinkon@okinawatimes.co.jp